
無限物語 第2章（光灯し）

ひぐらしの79562

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限物語 第2章（光灯し）

【著者名】

NZマーク

ひぐらじの79562

【あらすじ】

第一章で、悲しげな最期を迎えた龍牙とその仲間たち・・・。

しかし、少年はあきらめてなかつた・・・。

もう一度・・・。

始まり・・・。

第1章で、悲しげな最期を迎えてしまった龍牙とその仲間たち・
・・・・・。
もし、あれが夢ならば覚めてほしい・・・・・。
それよりも、夢であつてほしい・・・・・。
暗闇の中で彼はそう願い続けていた・・・・・。
一度終わった物語・・・・・・・・・。
いや、決して終わってはない・・・・・・・・。
まだこの物語にピリオドはつかないので・・・・・・・・。
物語の間にコンマがうたれただけ・・・・・・・・。
少年は願い続ける・・・・・・・・。
もう一度あの村へ・・・・・・・・・・。

秋風／遊び心（前書き）

ついに始まりました！第2章！！

まだ、未完成ですが、作者の頭の中では物語でできています！！

秋風／遊び心

(秋風)

悲しみの音響・・・。

どこからか、流れてくれる・・・。

思い出の時・・・。

頭の中で空回り・・・。

みんなの笑顔・・・。

今、散つて消えてゆく・・・。

俺の犯した罪がどんな事であれ、誰からも今じゃあ、許してもらえない・・・。

目の中が熱くなり、胸が苦しい・・・。

俺は、このままどうなるんだろう！？

分からない・・・。誰もこたえようとしない。

なぜかつて！？そりやあ決まつている！

俺の罪が大きすぎた！・・・重すぎた！なのに、罰を受けなかつた・・・。

罰から、逃げ回つていた！

今、俺がもう一度、あそこに戻るとしたら、どうするだろ！？

きっと、同じ過ちはしないだろ！？・・・。

理由はない。ただ本能がそう言つ・・・。

そういう、この景色、前もみたよな！？

暗闇という、景色を・・・。

俺は、助けが来ると思いこんでしまつた。

だが、あきらめた。

罰のない俺はやり直す必要はないと思つたからだ・・・。

・・・明日は、明日。今日は今日。月日は流れ、明後日は・・・。

意味不明な言葉を心に刻みつける。

何のためかは分からぬ。

俺がこないと、あそこはどうなるのだろうか？
そんなことを思い始める。

ぴかっ！？

暗闇に一つの光。

光よ、光よ、光よ、ひかり！俺は一定要ればいいのだらうー？
光は答える。か細い声で・・・。

「行きなさい。あなたの罰はありません。ですが、あなたに使命を
与えます！」

辺り全体に光が差し込む。

「次のみんなは幸せに・・・」

そのことばで光と闇は消えた。

(遊び心)

目を開けると、引っ越して間もない俺の部屋の天井・・・。

「あいたたた・・・。足が痺れるし。」

俺は、痺れた足をなんとか真っ直ぐに伸ばす。そして再び、天井と
にらめっこ。

今日は、土曜日か・・・。

ふと、頭の中に浮かんできた。記憶が曖昧だ・・・。やつをみた夢
の記憶しかないみたいだ・・・。

「・・・暗闇。光・・・。あのときと同じような夢だったな・・・。」

「

あのときは、電車でここに来るときの」と・・・。
あのときも記憶が曖昧だつたけ・・・?
びゅーー！

俺がそんな事を思つていると、窓から少し肌寒い風が入りこんでき
た・・・。

「おー。寒つ！誰だよ、窓開けたのー！」

俺は、まだ少し痺れている足で立ち上がり、窓の所まで歩いてい

く・・・。

(窓を開けたの俺だったような気もするなー。まあ、いいやー。)
腹のなり出した、午前7時30分頃・・・俺は、飯を食いに階段
を降りるのだった。

ガチャ！

リビングのドアを俺は勢いよい開ける！

「おはよーーー！」

今日も朝から元気いっぱいの挨拶をリビングいっぱいに響かせる俺
！挨拶って気持ちいいなー！

トウルルルル！

気持ちよい挨拶を終えたとたんに、リビングにある電話がなり出しだした。

「龍牙ーーーおはよーーーは、いいから、電話にてちゅうだいーーー！」

ガーンー！

なんだよー！人がせっかく気持ちいい挨拶したのに、その言ひ方はーーー！

「龍牙ーーーよろしく頼むぞーーーがははははーーー！」

テレビをみながら笑つている親父・・・暇なら親父が電話しうよー。
そう思いながら、結局、俺は受話器を取つた。

「はーーーもしもし、海道ですが、何か御用ですか？」

俺は、少し早口でしゃべる。昔からの癖だ。いろいろしたら早口にななるという癖！

すると、受話器の向こうから、思わぬ人からの声がするのだった。

「えつーーー？」

俺は、驚きを隠せなかつた。

だつて、電話の相手は・・・。

遊びまつり（前書き）

龍牙がでた電話・・・。
そのあいては・・・。

遊びほうけ

(遊びほうけ1)
キッキー！

自転車のブレーキ音が鳴り響く・・・朝、10時。

「ここかー？ファックスの地図見るかぎりじや。」

俺は、長い階段の下に自転車を止めた・・・。

そう、俺は月光寺というお寺に来てるのだ・・・。

えつ？なぜかつて？そりや・・・。

「やつと、来たか・・・。待ち合わせ10分オーバー・・・。どうせお前のことだから道に迷っていたんだうつしまったくだらしない奴だな！」

後ろからなんとかとてもむかつく口調でしゃべりかけてくる奴・・・。

「おう・・・。お前から電話つて見た目に合わないなー。平泉彩人！」

そう、そこにいたのは、クラスや地域別テストで万年一位・・・。顔はいいんだか、性格がダメダメというより、クールすぎる男・・・。平泉彩人だ！

「ふん。俺が・・・電話するという時は重要な時だ！決して、遊び半分という奴とはいっしょにするなよ！」

あー！腹の底から・・・いや、足の先から頭のちょっとぺんまでのすべてがむかつく奴だー！

「んで？要件は何？早くしてくれよ！俺には漫画という友達が家で待ってるんだが・・・。」

すると、彩人は、フンッと鼻で笑う。

「お前は、どういう環境で育つてんだよ？休日に漫画？笑わせるなよ・・・。」

ムカムカムカム力！

「まあ、いい！早速だが、本題に入ろう・・・。」

話題変えた所で俺のムカムカ力はおさまらない・・・。

ただ、こいつといふ時間が短くなると思うとムカムカが消える。

「单刀直入に言つや・・・・・。準備はいいな？」

「ああ！なるべく、わかりやすく、早くな！」

すると、彩人は「ホンとせきばらい・・・・。あれ？なんだかこいつらしくないな・・・・。落ち着きがないなんて。

「早く言えよ！」

俺は、落ち着きをなくした彩人に言つた。

「じゃあ、言つぞ・・・・。お前、一昨日引っ越しして来ただろ？」

「あ？それがどうしたの？」

すると、彩人は目をキョロキョロさせて恥ずかしそうに言つた・・・・。

「紅川のこと、どう思つ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えつ？

(遊びほうけ2)

辺りは、木々に包まれた、月光寺の階段下・・・・。

俺と彩人の会話には、少しの沈黙が訪れていた・・・・。

「えつ・・・・・？どうつて？」

沈黙は、俺の質問によって打ち消された。

「いや・・・・・。だから、お前は紅川のことが好きなのか？」

えつ？えつ？え――――？

俺は、いきなりの質問に戸惑いを隠せない・・・・。

「うーーん？えつと？さ、さあな？恋愛として見たことなんてまだないや！」

俺自身でも何が言いたいのか分からぬ、曖昧な返事をしてしまった。

「ふん。 そうか、ならない。」

何だか、彩人はほつとしている……。もしかして？

「お前……。もしかして……。」

「おーい！龍ちゃん！」

俺が、彩人に問い合わせようとした瞬間……。誰かが俺を呼ぶ……。
この声は……。

「げげ？ 何でお前達ここに？」

そうその声の主は、優香。そして、その後ろにいる2人組は、りん
とらんだ！

「何でって、せっかく龍ちゃんの家まで行って、電話したのに、龍
ちゃんいないんだもーん。」

「おー！？ それは悪かつたなー……つて、何でわざわざ家に来て
電話してんだよー！？」

俺のつっこみが久々に響く……。久々のつっこみって気持ちがい
いなー。

「いやあ、龍ちゃんビックリ、ドッキリ、地獄の果てにご招待！ 作
戦を決行しようと……。」

「おー！なる程なる程ー！ 確かにしたくなるよなー！ それー！……
つて言うと思つたかー！ 何だよ？ その作戦？ かわいいネーミングセ
ンスの裏腹に、最後、俺に氏ねと言つてると同じだぞ！？」

「「「あははははー！」」

みんなの笑い声が響く……。幸せな時間だ！ 漫画読んでいる奴の
気持ちが分からぬや！

「みんなー！ ようこそ来ましたー！ ブー！」「

えつ？ この声？

そう、声の主はいつの間にやら俺の後ろに立つていて笑つてゐる、
桜ちゃんだ！

「おー！ 桜ちゃん！？ いつの間に？ ……それに、よつこを来まし
た！ つて？」

俺の問いかけ……。りんが答える。

「あれ？ 龍ちゃん、知らんの？ ここ、月光寺は、ゆうじょ正しき木

下家のお家や！＝桜と天音ちゃんのお家ちゅーことやな！
相変わらずの、訛り（なまり）関西弁口調・・・まあ、伝わりやすいからいいか！

「ちなみに、俺達、花谷家なフランク・Hanatanaiだからなー今後もよろしくー！」

弟のらんか 必要なし説明をしてくれた。まあ 僕自身も初めて知つたからいいか！

俺の問いかけを彩人が取り上げる。

えりと、ここへ見っこね、いつも遊んでいるから。。。

三ノ二

その声が合図で残り少ない蝉が鳴きだした・・・。

(遊びほつけ3)

木々に止まっている蝶

木々に止歇いでしの鶯透の鳴き声が一斉に響き渡りました。

卷之三

る。

「心地がいい。」

「くつへ――・らん | ト上がつ――・」

鬼はこの俺、海道龍牙がやつている。

「後は…・・・・・。彩人だけだな！」

あいつが最後に残るなんて意外だな……。見た目的にクールでがり勉なんだがな！まあ、俺の予想じや、豊富な知識で見つからない隠れ

場所を考え出し隠れているに違いない！

そつー隠れ鬼のようにな!

……………あれ
！？

俺の頭の中によぎった一つの単語……。それは、聞いたこともない一つの単語だった……。けれど、なぜだろう？すじぐこの言葉を聞くと、心がはりさけそうになる……。意味も知らないのに……。なんで？

ふつふつと何かがこみ上げてくる……。

「…………えつ！？」

そう、涙だ。俺は今、意味も知らない言葉に涙を流しているのだ。なぜ泣いているのか分からぬ自分が憎い……。

「…………龍牙くん？」

いつの間にか立ち止まっていた俺の隣に桜ちゃんが立っていた。
「すまないな……。俺、何で泣いているのか自分でも理解できなくて……。それがまた悔しくて、悔しくて……。」

すると、桜ちゃんはにっこりと笑つて俺を見つめる……。

「大丈夫です！龍牙くんは何も悪いことはしてないですよね？」

「悪いこと……。ここに来てまだしてないと思う……。

半泣きの俺……。恥ずかしく思えてきた……。

「なら大丈夫です！神様は怒つたりしないです！ぶー！」

「そうか……。」

だいたい分かる……。悪い事とはきっと昨日話してもうつた裏山の事だろう。

「龍牙くんが泣いたのは、きっと、人生の途中で石ころにつまづいて、立ち上がることができなかつたからです……だから、だから……。」

「…………手を差し伸べる。」

桜ちゃんの隣にいつの間にか天音ちゃんが立っていて、普段開かない口を開いたのだ。

「・・・手を差し伸べる？それは一体？」

「例えばですね・・・私がこんな風に倒れているとします。」

桜ちゃんはそう言いながら仰向けになつた。

「龍介くん！立たたま私は手を差し伸へてください！」

その間ちだ、手を設ぢやんこ差し母びとある。

「あれ、どうしたよ桜ちゃん？ 手を伸ばさないと立ち上がりがれないぞ。

卷之三

「そうです。片方でも手を差し伸べなかつたら、手は届かず、片方は立ち上がるこどができず、もう片方は助けるこどができず見殺しにする。」

「そんな、見殺しで、やりますまい?」

「つまり互いが互いを信じあって手を伸ばさないと、幸せをつかむ

卷之三

陽の雰囲気は、俄々の香りを嗅ぎます。おどろいていた一瞬。

北齊書卷之三

さつままでヒヨウが鳴いている。

「まあ、こんなこと言つてもあなたは分からないんでしょうね。」

安ちゃんの言葉が俺の心を殴りつける。

「幸せをつかむためには、あなたの存在が鍵なのにな・・・。」

そう言つて、桜ちゃんは行つてしまつた。天音ちゃんもいつの間にかいなくなつてゐる。

「幸せか・・・」

俺は、何がなんだか分からぬまま、彩人を探し始めた。

「龍ちゃんーん！！」

すると、後ろから優香の声・・・。

「ん？ どうした？」

すると、優香はエヘヘと笑いながら喋る。

「実はわー。今から会議があるんだよねー。」

？？？

「会議――？」

俺には優香が何を言つてゐるのか分からなかつた。

「あれ？ 知らないんだつけ？ 東山地区会。」

？？？

「えつ？ えつ？ えーー？ 何だよそれ？」

優香はありやりや という顔をして、しゃべります始める。

「龍ちゃん、本当に知らないの？ 東山に来たら入らないといけないはずなんだけど・・・。」

「そ？ そうなのか？ ・・・。あー回覧版ならきてるぞー。」

すると、優香は安心したような顔をする。

「なら大丈夫みたいだね！ 龍ちゃんも地区会の一員だよー。」

「そ？ そうなのかー？ ジャあ、俺も会議に出席した方がいいってことかよ！？」

優香は首を横に振る。

「いや、あたいだけでいいんだよー。」

「あれ？ 何で？」

優香は俺に指をさす！

「なんたつてあたいは、学級委員長だからねー。」

テンション高い・・・。とてもなく今じゃついていけないかも。

泣いた後だし。

「まあ、会議見たいならきてもいいよ。」

「えつ？いいのか？」

「うん！だつて会長はあの木下姉妹のおじいちゃんだよ！」

？？？

「そうだつたのか―――――!?」

「あれ？本当に何も知らないんだね。副会長はあたいの親だよ――！」

「それも初めて聞いたよ。」

にひひひひ！と優香は笑っている。そして、

「みんな――――鬼ごっこはやめて、会議に行こうよ――！」

優香の一聲でみんなは一斉に集まってきた。

「ふん、海道龍牙。ついにあきらめたか。」

どこからか、現れた彩人・・・。こいつ、どこに隠れていやがったんだ？

それにしてもこいつの言葉、聞き捨てならん。

「何言つてるんだ！俺にかかるばお前なんか。」

「ふん！面白い！なら今すぐにでもおてあわせ願おつか！」

ビリビリと俺と彩人の間に火花が鳴つているようだ・・・。

「勝負だ！」

あれ？会議は？

(遊びほうけ5)

「ちよつと、2人とも喧嘩はよしなつて！」

優香の声が、蝉の声と混じつて聞こえる。

「優香！何を言つてる？これは男同士のバトルだ！」

優香の声を無視して彩人との距離をつめる俺・・・。優香が今は弱く思える。

「紅川・・・。余計な手だしは無用・・・。すぐにコテンパンにする・・・。」

優香は彩人にそう言われ止めるそぶりをやめた・・・。

「俺達がこうやって喋るの今日が初めてなのに、何でこんなことに

んつてんだろうな？」

俺の問いかけ・・・。彩人は鼻で笑い答える。

「フン・・・。そんなの決まつてんだろ。」

彩人は黙り込む。あいつにとつての勝負の理由はきっと優香だろう。

俺はそう察した。

しかし、俺がこいつと闘う理由は何なんだ・・・?

(お前が闘う理由……。それはこの後に深く意味を持つ。この後に深く関係するだろ？……)

どこからか響き渡る声……一体誰？？

「…どうした？ 悪気ついたか？」

「二年、心うねの、」彼は、少しおどけた顔で、

•
○
L

彩人は笑いだす
・
・
・
。

なんだ声で?どんな声だよ?俺の声か?まだや

「お前の獨り言か?」

卷之三

がばつ！

「龍牙くん・・・。なんだか、さつきから怖いです。怒鳴つてます・・・。」

「我を失いかけていた俺に、桜ちゃんが抱きついてきた。そして、俺

自分自身も何がどうなつてゐるのかさえ分からぬ……しかし、

明らかにおかしい。あの声は一体。

「龍ちゃん、ここは落ち着くために、勝負はやめて会議に行こうよ

「ルーチーさんが一番ですか？」

うんとつんも心配している。

「彩人！あんたもいいでしょ？」

「・・・・・・・・・ああ。」

優香も彩人も何を言わない天音ちゃんもさうと
みんなみんな、俺を心配してくれた。

「みんな、すまない・・・・・。ありがとうございます。」

あの声の正体は分からぬ……。だが、仲間がいたから一人で考
えて、暴走しなくて良かつた。

俺は
ありがとう
と心から思つてゐる。

17

あなたと会えたそれだけで、
俺の悩みが消えました。

君に会えたそれだけで、

私の苦労が消えました。

「さうで、私とお話しで、

たがこに言おう。・・・あつがどひ。

あらがとうりと
詩題名

東山地区会／会議（前書き）

遊びに飽き・・・。

龍牙たちは、地区会の会議へと参加するのであった・・・。

東山地区会／会議

(東山地区会)

ここは、月光寺の本堂の隣にある東山地区会集会場……木は黒みをおびた見た目から、そうとう昔に建てられているようだ。木のにおいが鼻の奥をくすぐる……。

「ここが、集会場か……なんか、木がみしみしいってるぞ!」

「まあ。100年くらい前から建てられてるし、良く雨が降る東山に木造建築なんてもんを建てたら、木が所々腐っちゃうよ!」

優香が簡単にまとめて語ってくれる。そして、座布団を一人一枚、床に敷いて、そこに座った。

「そういうや、全然まだ来てないよつに思えるが……。」

俺の、突然の問いかけ……。来ている人は、20人程度……。俺達を合わせて、30人になるかならないかだ……。

「…………いつも、…………」のくらー。」「

「…………え?」

俺の隣にいた、天音ちゃんがか細い声でこたえてくれたが、俺は思わず聞き返す。きっと、無口な天音ちゃんが口を開いたのにびっくりしたのかな?

「そうやねー。今日は、うちらが来たことで人数増えてるもんやねー。」

「来る人は来て、来ない人は来ない……。それが、小さい頃からのお決まりだつたけ……?」

りんとらんも語り出してくれる。

「…………一体何でだ?」

「…………」「」

俺の一言で場の雰囲気は沈黙へと変わった。

多分、これも100年罰当たり関連か……。場の雰囲気の変化より、そう俺は察した。

「…………ところで、龍牙くん？まだ会議じゃないのに正座なんかして、足痺れませんか？」

沈黙を打ち破つたのが、桜ちゃんだった……。

「ん？あはは！大丈夫！大丈夫！俺、正座には慣れてるんだよ…」
びりびり！

「痛つ！…！」

ドタン！

この効果音を聞いて、だいたい分かるだらうが、一つ言いたい事がある！

「足の痺れには気をつけろよ…」

場の雰囲気は光へと変わり、笑い声が集会所に響くのであつた……。

(会議1)

俺達が集会所に来て、何分経つただろうか？地区会議といつのは未だに始まらない。いい加減、飽きてきたぞ。

「ふあ～～～～～～～～！」

俺は、ワザとらしく、あぐびをして見せる。

「「ホン…」

集会所に来ている、おじさんの、せきぱらい…。多分、俺に対してかな？

「龍ちゃん！」龙ちゃん、おる人はみんなあんたの事、まだ知らんやで！

「そいつーそんな感じにあぐびする」とによつて、第一印象が悪くなるよ…。」

「悪い、悪い。やつだつたな。でも、つんとらんは飽きないのか？」
すると、二人とも首を横に振る。そして、その隣の優香が少し笑みを浮かべた表情で言つ。

「龍ちゃん。今から話すことを考えれば、集中できると思つ。つと、

「……でもまだ龍ちゃんには分からぬかな。」

「…………？」

言葉はでなかつた。今から、話すことつて？

ガラガラ！

「…………！？」

ドアの開く音。集会所の人々全員は、ドアに顔を向ける……。集会所の中は、さつきよりもはるかに静かになつた。まるで、誰もいないかのように……。

ドン――！

「ビクッ！？」

いきなり、後ろから、大きな音が鳴り響いた。思わず、声をあげてしまふ……。

「地区会長及びに――、我ら――、東山村――、村長、及び――、月光寺――、寺主の木下信平きのした殿の――、来訪に――、感謝の――、意味を――、こめ――。」

ドンドン――ドン――

「「「はい――」」

パチン――！

全然、流れにのつていけない……。どうやら、大きな音の正体は、太鼓らしい……。そして、その太鼓と掛け声で、音頭をとり、最後に、みんなで一緒に一回拍手ということだな……。俺、何も聞いてないんですけど……。

ドスドスドス。

「…………ん？」

気がつくと、木下 信平という人は、集会所にあがり、自分の決められた席についた。

(うまく、顔が見えないな。視力落ちたかな?)

そう思い、少し田を細めて見る・・・。
すると、相手を席をまた立ち上がる。
そして、どんどん俺に近づいてきたのだ。

(会議2)

「お主が、ここ最近、ここに引っ越してきた者かの？」

「えつ・・・・? あつと・・・・。 そうです。」

俺に近づいてきた、村長及び、地区会長、及び、こここの寺の・・・。
いや、分かりやすく言うと、木下姉妹のおじいちゃんとも言える方
が、今、俺の田の前にいる・・・。
何だか、ぞくぞくするな。

「ふむふむ、どれどれ、面をあげい。」

俺は、そう言われ、しぶしぶと顔を少しあげた・・・。

(逆光で、さつきから顔が見えないんだが・・・。)

「ふむふむ、そうか・・・・。」

村長はそう言つと、優香の隣にいる桜ちゃんと天音ちゃんの方に顔
を向けた。

「桜――――――天音――――――！」

ビクッ！

「――は、はい・・・・！」

いきなりの大声・・・・。思わず、こっちがびっくりだ・・・・。

「お前らといつやつは・・・・。」

「ゴクリ・・・・。」

俺は、村長の次の言葉を聞くのがこわかつた。・・・・・・・・次にく
る言葉が、俺の容姿、性格について言われると思ったからだ・・・・。
俺は、思わず自然に顔をうつぶせた・・・・。

「合格よ！――」

「えつ――――――？」

思わず、俺が聞き返してしまった。耳が嘘をついたのかな？

「いんな、美少年を口説きおとすなんて、私の孫も隅に置けないわね。おほほほほ。」

「えつ！……！」

俺は2度田の聞き返しをしてしまひ……。もはや、耳の方が正直なのかと思いこんでしまったからだ……。

そして、ついに、俺の耳が正直なのかを調べるためのタイミングがやってきた……。

雲で太陽が隠れたのである……。このおかげで、逆光はもうない……。

俺は、田の前にいる、村長の顔を見てみた……。

「…………」

言葉は出ない……。何でかつて？そんなの決まっている……。
さつきの村長の口調を聞けば分かる……。そして、顔を見ても分かる。

えつ、何が言いたいかつて？そんなの、見たら吐き気がするような、ちょつと、逝くような……。そんな、感じの顔にこの方はしてしまってるんですねよー自ら、化粧という方法でー！

「あのーーー？ちょっとといいですかね？村長さんって、ニコーハーフなんですかね？」

单刀直入に言つてみた。村長は、化粧でピンク色に染まっている顔を近づけて、にっこり笑顔でこたえてくれた。

「ニコーハーフじゃないのよ、私は完全な乙女なのよん」

「…………」

駄目だ……。じいづもう、手遅れだ。

そり、思ひ、中学2年の残暑、やがて会議が始まるのであった。

(会議3)

残夏、昼夜がり……。

外は暑いが、集会所の中は木製のおかげか、夜みたいな涼しさだ……。

。

「・・・ですから、今年に入つてからの高齢者の割合が、前年に比べ、減つてきていると・・・。」

「確かに、去年に比べて減つてきている・・・。しかし、移民の数は増加している傾向にありますぞ！」

あんなこんなで会議は、人口についての話し合いが始まっている・・・。

俺の隣の、りん、らん、そのほかにも、全員がメモ帳を開いて、メモっている・・・。

「こいつら、日頃から持ち歩いているのか?と突っ込みたくなるが、ここは眞面目にいかないと後が怖いだろうと思ひ、流してみる。

ざわざわ、ざわざわ・・・。

メモしながら、みんなは独り言のよう口をつぶやいている・・・。

こいつやって見ると、何だかみんな、何かにとりつかれてるようだ・・・。

「皆の衆、静かになさい！人口構成については、話し合いは終わりにします。」

木下姉妹のおじいちゃんの声でおじさんもおばさんもりん、らん、優香、桜ちゃん、天音ちゃん・・・。みーーーんな、ペンとメモ用紙を置いた・・・。

「続いて、9月の本会議に入りたいと思います・・・。いいわね？」

ゴクリ・・・・。

本会議・・・。今の俺には意味は分からなかつた。だが、さつきまでの雰囲気とはまた違う雰囲気に一瞬にして変わつたのは俺でさえ分かつた・・・。

ドクドク・・・・。ドクドク・・・・。

心拍音が伝わつてくる・・・。

「本会議入ります・・・。今年に入つての100年罰当たりの死者数は、10人です・・・。」

ドクン、ドクン。

今 の 言 葉 を 聞 い た と た ん 、 心 臓 が い つ も の 倍 以 上 に 、 動 き だ す 。

(会議4)

ざわざわ・・・・・。

本会議・・・・・。それは、俺の心と頭の隅っこに封印しておいた、東山100年罰当たりの話し合いだった・・・・・。木下祖父が言った、今年に入つて10人死亡という言葉を聞いた集会所の人達は顔を見合わせて、驚いた表情で騒ぎ始める・・・。

「静かに！少しお黙りなさい！」

木下祖父の鋭く、華麗な声で集会所の中にまた沈黙がおどされた・・・。

「今から、私が死因、その人の年齢、性別を言つていくから、必要なことはメモしておくこと。いいわね。」

ゴクリ・・・・・。

思わず俺は生唾を飲み込んだ・・・。

「まず一人目・・・。死因は大量出血によるショック死・・・。年齢は40～50代、男性・・・。詳細としては、例年と同じように、目立つた外傷もないのに出血だけ死亡・・・。この方は、警察官だったようね

。

一人目の説明は終わり、二人目の説明に入ろうとしたときだ・・・。
ぶつぶつ・・・。ぶつぶつ・・・。

誰かの独り言が俺の耳に入つてくる・・・。

「・・・警察。・・・みろ！あた・・・達に協力・・・から、罰・・・たんだ。・・・と、安河原の神様が・・・ったんだよ！・・・・・・
・ヒヒヒヒ。」

途中、途中、言葉が聞き取れず、何を言つてるか分からなかつた。

だが、警察と神様・・・。何か関係があるのかな・・・。

「以上で、すべてよ！」

木下祖父の声・・・。

なんだ、誰かの独り言を聞いているうちに終わってしまったのか・・・。

（もうちょっと、罰当たりについて知りたかったのにな・・・。）

そんなこんなで、窓のほうから外を眺めてみた・・・。

夕日が沈みこんでいく・・・。今日もこれで終わりか・・・。
きっと、明日もいい日になるんだろうなー。

そんなことを思っている俺・・・。

会議は間もなく終了だ・・・。

（会議5）

カナカナカナカナ・・・。

夕方になり、ひぐらしがいっせいに鳴き始めた・・・。

昼間に比べて外の気温は、急激に下がり、肌寒さが増す・・・。

「「「ありがとうございました！」「」」

ガヤガヤガヤガヤ・・・。

一瞬にして変わった場の雰囲気・・・。集会所の中には賑やかさが
増す。

「は―――」

気が抜けたのか、俺の口からは自然にため息が抜けていく・・・。
そんな俺の首裏に、冷たい感覚が伝わってきた・・・。

「ひつ！――！」

俺は思わず悲鳴をあげ、身を縮めた・・・。

「あはは！龍ちゃんお疲れ様！」

身を縮めていた俺に声をかけたのは、優香だった。よく見たら冷えた缶ジュースを両手に一つずつ持っている・・・。

「お前な―――こんな寒いときにそれをしたら、いくら俺でもあ

の世逝きだぞーー！」

「<-----! セリフ -----!」

優香はそう言つてニヤリと笑う。・・・。

- 10 -

• • • • •

ヤハヤが、たゞ、俺がおくこと、力はかりに

——?——」南雲だつたナ———。今度がひな、ひやんと腹筋も用意

しないとな。
・
・
・
。

おや、おかしかった——。南極なのに川が見える……。あそこの中

ボフッ！！

一、「」

「お父さんの二年間は猛烈な病氣で死んでしまった」

— 1 —

「龍ちゃんの、顔が完全に幸せそうだったよね（笑）」

いの間はかりとせんも語じは參加していた。

心筋梗塞の原因は、主に冠動脈硬化によるものである。

「いやーー熱い、熱い心を持つている龍ちゃんの心を冷やしてあげ

「はー、たたけたよ！」

「…………」（絶え間なく流れ込む）

さい!

その時、集会所の入り口で木下祖父が鍵を持って俺達に呼びかけた。

•

「」「」「」

そうして俺達は玄関へと急ぐ・・・。

「あ！ 海道くん！」

木下祖父が靴を履こうとした俺を呼び止めた・・・。

「これ、良かつたら連絡してね」

一切のメモ用紙・・・。それを渡され、開いて見た・・・。

そこには、丁寧に書かれた、電話番号とメアドが記されていた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1669p/>

無限物語 第2章（光灯し）

2010年12月2日17時19分発行